

予科練



No.482 令和6年

5・6月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.25…	2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》……………	3
○第57回予科練戦没者慰霊祭最終ご案内……………	4
○豊後水道フライト・大村基地訪問……………	5
○彗星未だ還らず或る予科練出身搭乗員の軌跡③…………	10
○香月兵曹を偲んで②……………	13
○多田野語録……………	18
○雄翔館見学者所感……………	19
○海原会寄付者芳名簿・お知らせ……………	22
○事務局日誌……………	23

公益
財団法人

海原会

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑

高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行
予科練習生を偲びてよめる

海はらに

はたおほそらに

散華せし

きみら声なく

いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑 天山隊の碑 No.25



昭和二十年四月一日、米軍の沖縄本島上陸作戦開始により来攻した米機動部隊に対し特攻攻撃を行う「菊水一号作戦」が四月六日に発動され、九州南部に展開した第三、第五航空艦隊の第一機動基地航空部隊の三九一機が出撃、そのうち二二五機が特攻攻撃を展開した。これに呼応して戦艦「大和」を旗艦とする特攻艦隊も徳山を出撃した。

この作戦に出撃した航空機は、艦攻「天山」「九七」艦爆「彗星」「九九」陸爆「銀河」で編成された飛行隊が、南九州の各航空基地から出撃、米空母、艦艇多数に莫大な損害を与えた。天山隊は、「戦闘詳報」によると神風特別攻撃隊第三御楯隊一三一空所属の攻撃二五一、同二五四、同二五六飛行隊、二〇一空の十機で、三〇名が散華し連合艦隊告示第九一号、第三七号、第一四六号により全軍に布告された。

天山隊の偉勲を永く後世に伝えるため、嘉戸一等飛行兵曹の遺族が発願し、自費を投じて、この碑を建立した。

- 所在地 世田谷区下馬世田谷観音
- 揮毫 高橋三吉氏（海軍大将）
- 問合せ 世田谷山観音寺（特攻観音）

世田谷区下馬四一九一四

(03・3410・8811)

海軍飛行豫科練習生

遺書 遺詠 遺稿 辞世

遺詠

◎木村 信一 飛曹長 (二十八才) 秋田県出身

生きる気は更にあらねど君のため

待ちに待つ日の今日ぞ来にける

乙飛8期 昭和二十年三月二十一日 第一神雷攻撃隊 一式陸攻桜花搭載
鹿屋発進 鹿屋160度360海里的敵機動部隊

◎粕谷 義蔵 少尉 (三十二歳) 長野県出身

覚悟して大海原に羽ばたきの

響きは永久に靖國の杜(もり)

乙飛4期 昭和二十年三月二十一日 第一神雷攻撃隊 一式陸攻桜花搭載
鹿屋発進 鹿屋160度360海里的敵機動部隊

第57回予科練戦没者慰霊祭最終ご案内

一 偲ぶ集い

日時 令和六年五月二十五日（土）午後六時開宴
場所 L AUBE Kasumigaura
会費 七千円／一名

二 慰霊祭

日時 令和六年五月二十六日（日）雨天決行
午前十一時（受付九時半開始）
場所 雄翔園 陸上自衛隊土浦駐屯地武器学校内
※受付場所…予科練平和記念館横広場
会費 参加者 三千円／一名（ご同伴者同額です。）
会費はお弁当代及び慰霊祭実行費用として使用させていただきます。

三 玉串料の奉納

ご高齢等のために慰霊祭にご参加いただけない会員皆様で、玉串の奉納を希望される方は、同封の「郵便振込取扱票」をご利用ください。
奉納されました玉串料で、生花を二人像に奉納いたしますとともに、ご芳名簿を作成して奉奠いたします。
連絡先 「第五十七回予科練戦没者慰霊祭実行委員会」

TEL 029-886-5400

慰霊祭ボランティアスタッフを募集しています

申し込み方法

ご協力いただける方は、海原会ホームページのお問い合わせ頁からお申込みください。折り返し事務局からご連絡させていただきます。

【主催】 公益財団法人 海原会

【日程】 ご協力いただく日は以下のとおりです。

内容	日程	時間	場所
会場等準備	5月24日（金）	9時～15時	雄翔園
慰霊祭	5月26日（日）	7時半～15時	雄翔園

◆ 慰霊祭当日は必ず出席してください。会場等準備は可能な方のみで結構です。作業内容は受付及び会場案内等です。

◆ 5月24日（金）及び5月26日（日）の昼食は海原会で準備します。

【お問い合わせ・実行委員会事務局】

〒300-0301 茨城県稲敷郡阿見町青宿489番地1

電話 029-886-5400 FAX 029-886-6400

Email: y-hirano@yokaren.jp

豊後水道フライト・

大村基地訪問

カ山 清司

【はじめに】

去る令和五年十一月二十五日、私にとって念願だった四国沖の豊後水道上空をセスナ機で飛行する機会に恵まれました。

本空域は、大東亜戦争末期の昭和二十年七月二十四日、呉軍港を空襲した米海軍艦載機群が母艦に帰投する際、大村基地に駐屯していた第三四三航空隊（以下、「三四三空」という。）の「紫電改」部隊が迎撃した場所でした。本稿では、大東亜戦争末期の豊後水道上空の戦闘と同戦闘で戦死した総指揮官・鴛淵大尉の略歴を踏まえ、セスナ機のフライト、後日の大村基地訪問へと筆を進めてみたいと思います。

ます。

【三四三空

昭和二十年七月二十四日の

戦闘】

大東亜戦争における我が軍の敗色が濃厚になりつつあった昭和十九年十二月、「源田サークラス」と称された源田實大佐（海兵五十二期）を司令とし、愛媛県の松山基地において三四三空は戦闘機「紫電改」を主力機として開隊しました。

初陣である昭和二十年三月十九日の松山航空戦で劇的な空戦を展開（撃墜五十二機（日本側記録））したのを皮切りに、その後の沖縄航空戦へ参加、B―二十九の迎撃等、各地を転戦し敗色濃厚な戦況の中、他隊では困難となった戦果を挙げ得る有力な航空部隊として活躍しました。

しかし、激闘を潜り抜ける中、歴戦の勇士、機材共に順次消耗し、七月二十四日の米

艦載機迎撃の戦闘では、最盛期の六十機単位での迎撃（三月十九日の松山沖航空戦）より三分の一の戦力である二十四機が大村基地を発進（三機が引き返す。二十一機が交戦）し、迎撃することとなりました。それでも地上から無線を通じて、逐次の米艦載機に関する情報を入手、佐田岬沖上空六千メートルでの空中哨戒で艦載機群を待ち構え、呉空襲を終えて逐次豊後水道を約三千メートル南下する敵梯団の最後尾に狙いを定め、迎撃に入りました。約十分程度の空戦の結果、三四三空は十六機を撃墜（日本側記録）しました。

一方、三四三空の損失も少なくなく、総指揮官の戦闘七〇一飛行隊長・鴛淵大尉（海兵六十八期）や「空の宮本武蔵」と称された撃墜王・武藤金義少尉（操練三十二期）など六機が未帰還となりました。

同日の戦闘に関しては、米海軍側の記録が残されており、空母「サン・ハシント」の第四十九戦闘飛行隊の所属で、F6F戦闘機「ヘルキャット」搭乗員であったジャック・ギブソン中尉の戦闘報告によると、「（豊後水道を南下中で）前方を行く味方編隊より、日本機が被さってきたとの無線が入った。私は列機に向かうと、日本機二機が此方に向かってきたのに気付いた。その際、相手機の水平尾翼前方の胴体に白いマーク「幅約一フット」（注：三四三空では、隊長機の胴体に帯を塗装していた。）が見えた。日本機が有効射程距離に入って最初の一撃で敵機が降り、その後更に射撃したところ、操縦席付近に命中し、真つすぐ海中に墜落した」と記され、墜落地点は、時刻一〇一五に水ノ子燈台付近海域と記録されています。

【戦闘七〇一飛行隊長

鴛淵大尉】

昭和二十年七月二十四日の戦闘で三四三空総指揮官を務められ、戦死された戦闘七〇一飛行隊長の鴛淵孝大尉の略歴を紹介していきます。

鴛淵大尉は、大正八年十月二十二日生まれ長崎県出身で、昭和十二年四月海軍兵学校第六十八期生として入校後、昭和十五年八月に卒業されました。海兵卒業後、搭乗員として飛行学生課程に進み、戦闘機操縦者となった鴛淵少尉（当時）は、大分空で飛行教官を務められた後、昭和十八年五月に第二五一航空隊の一員としてラバウルに進出。後半近く激闘を経たのちに、同年十一月に厚木に帰還。

その後、二〇三空戦闘三〇四飛行隊長として、北千島での迎撃戦、その後南進して台湾沖航空戦やフィリピン航空戦に参加されました。

昭和二十年一月に松山基地

に着任後、三四三空では戦闘七〇一飛行隊長を務めると共に、他二つの飛行隊をも取り纏める空中総指揮官として、昭和二十年三月の松山沖航空戦以降の各戦闘を指揮しました。

人柄について、三四三空の飛行長だった志賀淑雄少佐（海兵六十二期）によると、「品行方正だが芯は強い。理詰めで計画・訓練をこなす。参謀になっても腕を振るつたであろう」と評されました。

また、七〇一飛行隊の杉滝巧上飛曹（丙三期）は、「穏やかだが勇気があり、隊員の信頼を一身に集めた」、同飛行隊の塩野三平上飛曹（甲八期）は、「温厚で人情厚い隊長」との印象を残されるなど、操縦技量のみならず知性・人格に秀でた方で、我が国最高の武士と讃えられる南北朝時代の武将・楠木正成公にたとえ、「三四三空の大楠公」とも称された指揮官でした。

以上、前置きが長くなりましたが、上記を踏まえて豊後水道でのフライト及び大村基地見学の項に進めたいと思います。



二五一時代の鴛淵大尉

【豊後水道上空のフライト】

さて、終戦間際の空戦を偲ぶ豊後水道上空のフライトですが、私の立案の下、海上自衛隊のヘリパイ出身の中垣達朗氏がフライト経路を決定し、友人である航空自衛官も同乗する形で進めていきました。

十一月二十五日の午後一時頃、長崎空港から出発。当時の大村空は、現在では陸上自衛隊・竹松駐屯地の敷地であり、全く同じ場所からの離陸

は不可能でしたが、すぐ近傍の長崎空港は大村湾に所在する為、当時と極めて近い環境下での離着陸の体験が可能な立地と言えます。

当日の天候は、快晴で風もほぼ無し。機長である中垣さんの操縦の下、こちらも余裕を持って周辺を撮影できるコンディションでした。一度、佐賀空港にて給油。有明海に面した空港であり、近い将来、陸上自衛隊佐賀駐屯地（V-22「オスプレイ」輸送機を配備予定。現在は、千葉県木更津駐屯地に暫定配備）が開設されるため、基礎工事が進行中の様子が伺えたのと、眼下には広大な有明海が広がっていたので、当時の三四三空の勇士達もこの光景を目にしたが、警戒ポイントの佐田岬を目指したのかな、と想像しながら東へ飛行しました。佐賀空港を飛び立ち、速度一〇〇ノット、高度四、五〇〇フィートで東へ飛行、途中



大村湾上空から見る旧大村航空隊敷地

でくじゅう連山を横目に飛び続けること約一時間すると、大分県佐伯市に到達し、いよいよ念願の豊後水道上空にたどり着きました。セスナ機ですと、巡航一〇〇ノットの為、約一時間の行程でしたが、紫電改の巡航は約二〇〇ノットと二倍の速度の為、大村基地からは約三〇分で空戦空域に到達できたのではと推察されました。更に豊後水道を東進していくと、向かって斜め左側に佐田岬が、前方斜め右側に小さく水ノ子島燈台が目に入

入ってきました。いわゆる同空域が、昭和二〇年七月二十四日の三四三空と米海軍艦載機群との空戦空域になります。

実際の三四三空が哨戒した高度は、約六、〇〇〇メートル（一八、〇〇〇フィート）、米艦載機群は約三、〇〇〇メートル（九、〇〇〇フィート）であり、我々が飛行した高度は管制空域の関係で四、五〇〇フィート前後と差はありますが、空から眺めると、豊後水道の空域は以外と狭く、ここで戦闘機が全速近い速度で戦闘を繰り返すと、あっという間に大分県東岸か愛媛県西岸に到達してしまうことが分かりました。その後、水ノ子島燈台付近まで高度を落とし、至近距離から周回しました。日米の記録から、鷗淵大尉を始めとした戦没者たちが同海域で眠っていることに思いをはせ、心から冥福を祈ると共に、周辺海域には常時白波が立っているなど、か

なり流れが急な海域であることもわかりました。この他、戦記によると、米艦載機搭乗員にとって、水ノ子島燈台は呉空襲の行き帰りにおける良い目印とされ、通過儀礼のように銃撃を加えることもあったそうです。もし水ノ子島に上陸（基本、立ち入り禁止）し、近くで燈台を見学する機会があれば、かつての弾痕が残っているかもしれません。



上空から見る水ノ子島燈台

そして、本空戦では二十一機の紫電改のうち一機が、空戦の被弾により空域を離脱し、愛媛県愛南町の久良湾に不時

着、海没しました。機体は、昭和五十六年に引き揚げられ、現在は近傍の紫電改展示館に常設展示されています。この部分もセスナ機で再現すると、空域から約十分程度で久良湾に到達、上空から紫電改展示館を眺めることができました。これも紫電改の巡航から戦闘時の速度（二〇〇〜三〇〇ノット程度）を想定すると、三〜五分程度で不時着水に至ったものと思われます。

この辺りの海は、豊後水道と打って変わって白波はなく、穏やかな海面が広がっていました。おそらく、不時着水した紫電改の搭乗員は力尽きて海没したとみられますが、安らかな眠りにつける場所であるかなと想像したところです。ここから反転し、豊後水道を西進、佐伯市に到達、更に西に進み長崎空港に帰投することになりました。帰路は約一時間半で、全行程では約三時間余りのフライ

トでした。



愛南町周辺と久良湾（写真上の右側）

【大村市の駐屯地・基地見学】

翌十一月二十六日、今度は地上から三四三空の痕跡を偲ぶべく、大村海軍航空隊及び第二十一海軍工廠跡地を訪問しました。

午前十時、陸上自衛隊・竹松駐屯地の広報官案内の下、海軍格納庫、防空壕入口、当時の航空隊の敷地及び監視塔の説明を受けました。竹松駐屯地は、海軍時代の大村海軍航空隊の敷地があった場所に

なり、昭和二十年五月以降、三四三空が最後の根拠基地に選んだ所になります。

戦後、大村海軍航空隊の敷地の一部は民間用地としても分割されましたが、駐屯地には未だ海軍時代の史跡が残されています。

その一つが、大正十二（一九二三）年及び十四（一九二五）年に建設された赤レンガの格納庫になります。現在は、倉庫として活用されていますが、海軍時代には戦闘機クルスの航空機を格納し、大東亜戦争末期には米軍機による銃撃も受けたそうで、その痕跡が複数個所残されていました。弾痕を見ると、いずれも斜めではなく真つすぐ着弾していることが確認できるため、米戦闘機が地表近くの超低空飛行で銃撃に至った可能性を見て取ることができました。

当地は、三四三空の根拠基地であったことから、米軍の重点攻撃目標として複数回に

わたる攻撃にさらされたことは容易に想像できました。

また、当時の防空壕入口も残されており、広報官の説明によると、地下通路が敷地内でかなり長く繋がっている模様で、敵の空襲に備えた基地機能の抗堪性強化の施策が伺えるものでした。



大正十二年建設の赤レンガ格納庫

この他、白い通信施設の建物は当時のままであり、終戦直後の写真にもほぼ同様の姿を確認できる施設です。

午後からは、海上自衛隊・大村航空基地を訪問しました。この敷地は当時、東洋一の規



米戦闘機による機銃の跡

模を誇った第二十一海軍工廠があった場所で、当時の写真を見ると同敷地内には複数の工場棟があったことが確認できます。

基地広報官の説明によると、現在使用している格納庫の一つが海軍時代の鉄骨を使用していること、かつ戦時中は攻撃目標として複数回にわたる空襲を受けていたことが分かりました。この他、大村航空基地には、飛行艇が着水後に陸揚げする箇所があり、こちらも海軍時代からのものとの説明を受けました。

海軍時代ですと九七飛行艇、二式大艇が使用し、現在だと海上自衛隊のUS-2が使用するものになります。

【紫電改 展示機】

最後に、戦闘機「紫電改」を語るにあたって、現在も保存展示されている機体を二機、紹介したいと思います。

一機目は、豊後水道上空のフライトの際、上空から確認した愛媛県愛南町にある紫電改展示館の機体です。先にも述べたとおり、当館に展示されている「紫電改」は、豊後水道上空での戦闘における未帰還機六機の内の一機とみられ、昭和五十六年に引き揚げられた機体になります。

不時着水時を想定した展示となっており、着水時の衝撃により曲がったプロペラや、弾痕、海中での経年劣化を窺うことのできる機体です。

場所は、南レク公園の展望台がある所で、松山市からだ



展示館の「紫電改」

とJR予讃本線で宇和島まで、宇和島からバスで愛南町、現地のタクシーを乗り継いで行くことになり、やや遠方ですが国内で唯一の「紫電改」が見られる貴重な場所になります。当館には、引き揚げた機体に搭載されていた機銃弾や通信装備等の展示、三四三空戦闘三〇一飛行隊所属であった笠井上飛曹（甲十期）が寄贈した「紫のマフラー」があります。

今一つ紹介する機体は、米国ワシントンDCのダレス国

際空港近傍の博物館「ウドバー・ハジー」に展示されている「紫電改」です。

「紫電改」は終戦後、米軍の調査の為に三四三空で有名な大村基地から四機を抽出して横須賀に空輸、横須賀の追浜基地に所在していた二機の「紫電改」を含めて、程度の良い機体三機を抽出して米本土に四機を移送しました。

この四機の内、現在の三機が米本土の各博物館に展示されていて、そのうちの二機が在ワシントンDCの機体になります。当該機の製造番号は、五三四一で、当時の川西航空機鳴尾製作所で製造され、戦後しばらくは野外展示されるなど、経年劣化が進んでいましたが、約三十年前に完全復元され、現在では製造当時の姿を彷彿させる完成度の高い機体です。

我が国からは遠く離れていますが、成田空港からワシントンDCのダレス国際空港に

は直行便がありますので、他二か所（一機は、オハイオ州デイトンの米空軍博物館。もう一機は、フロリダ州ペンサコーラ海軍航空博物館）と比較したら、まだしも訪問可能な立地と言えます。



ウドバー・ハジー博物館の「紫電改」

【終わりに】

この度は長年の悲願であった、鷺淵大尉以下、豊後水道上空で戦没された方々への慰霊飛行が実現に至りましたことに関し、フライト経路を計画し、操縦して頂きました中垣様へ、また陸上自衛隊・竹

松駐屯地、海上自衛隊・大村航空基地の見学を準備し、当日は丁寧に対応して頂きました両広報官には、改めて感謝申し上げます。

そして何より、終戦間際の豊後水道上空に散華された「紫電改」搭乗員の方々について、これからも長く語り継いでいく為に、尽力していきたいと思います。

終わり

筆者の力山清司様は、昭和十九年十月十五日に比島クラーク上空における空戦で戦死された甲飛第十期 故力山茂樹一等飛行曹長のご実弟であり、比島を訪問しセスナで、兄が戦死した地の風景を自らの目で確認するなど、空からの慰霊活動を長きにわたり続けられています。

本年5月に開催予定の予科練戦没者慰霊祭ではご遺族代表を御勤め戴ける予定です。

(事務局)

彗星未だ還らず

或る予科練出身

搭乗員の軌跡③

佐藤 剛

第三章 戦いの空へ

【真珠湾攻撃に参加】

昭和十六年十月三十一日に飛練教程卒業後、伯父は航空母艦「翔鶴」に配属された。

「翔鶴」は十二月八日に真珠湾攻撃を行い、第一波攻撃に急降下爆撃隊（艦爆）二十六機、零戦六機が参加し、第二派攻撃隊として水平爆撃隊（艦攻）一十七機が参加した。伯父は艦爆隊に所属していたと思われるが、攻撃隊員の名簿に名前はない。

常識的に考えれば、飛練を卒業したばかりの伯父が、ベテラン搭乗員を差し置いて高度の技量を要求される艦爆の偵察員に選ばれることはないと思われる。おそらく待機要

員として先輩搭乗員たちの身の周りの世話をしていたのではないか。

乙飛九期出身で実際に攻撃に参加した搭乗員は七名いるが、全員水平爆撃隊の九七艦攻で通信を担当した。他に真珠湾に行ったが、実際の攻撃には参加していない九期出身者が伯父を含め十名いる。

（一部推定）

伯父の直ぐ下の弟の文二は生前、自身が海軍工廠で勤務していた頃に伯父が面会に来た（時期不詳）話を話している。これから戦地に行くのでその前に会いに来たという。その折、真珠湾に行つて来た事を語ったが、これからこの戦地に行くかは教えてくれなかったとのこと。

【飛練偵察練習生の

教員となる】

真珠湾攻撃参加後の昭和十七年一月五日、伯父は飛練偵察練習生の教員を命ぜら

れ、鈴鹿航空隊へ派遣された。ここで後輩の乙種十一期生や十二期生、及び甲飛や丙飛の練習生に十カ月に亘り偵察術の基本を指導したと思われる。教員時代に伯父は思いもかけず一人の同期生に出会うことになる。乙飛九期生として入隊したが胸部疾患のため二期遅れ十一期生として卒業した国見新太郎さんである。

伯父が直接国見さんを指導したかは分からないが同期生として旧交を温めたと思われる。



鈴鹿航空隊教員時代の伯父。撮影時期不詳
2列目左から4人目

国見新太郎さん
 (写真左)は東京都出身。
 昭和二十年一月 三十日南西諸島
 方面にて戦死。

国見さんと伯父が鈴鹿航空隊
 で一緒だったという確たる資料
 はないが、乙種十一期生の飛練
 の時期から可能性は極めて高い
 と思われる。



(注) 乙飛九期出身真珠湾攻撃参加者(敬称略)

氏名	母艦	戦死日	戦死場所
黒木勇三郎	加賀	昭和17年6月5日	ミッドウエー海戦
萩谷幾久男	赤城	昭和19年10月15日	占守島
村上守司	赤城	昭和17年10月26日	ソロモン
繁富悦行	瑞鶴	昭和19年7月25日	九州東方海域
西谷芳藪	瑞鶴	昭和19年3月31日	南洋群島
兼藤二郎	瑞鶴	昭和17年5月7日	珊瑚海海戦
高田忠勝	翔鶴	昭和17年5月7日	珊瑚海海戦

全員が水平爆撃担当の九七艦攻の電信員として参加した。

西谷芳藪さんは山本五十六戦死後、後任となった古賀峯一長官殉職時の搭乗員。

(注) 乙飛九期出身真珠湾攻撃参加者(推定)(敬称略)

氏名	母艦	戦死日	戦死場所
益田増雄	赤城	昭和19年3月30日	パラオ南東海域
平山繁樹	加賀	昭和19年10月14日	台湾沖航空戦
島田 直	加賀	昭和17年6月5日	ミッドウエー海戦
島田清守	蒼龍	昭和17年4月4日	小笠原北方海上
佐々木隆寿	蒼龍	昭和20年8月14日	香取基地
清水 巧	飛龍	昭和17年6月5日	ミッドウエー海戦
堂前清作	翔鶴	昭和19年6月7日	岩国基地殉職
大塚孝平	翔鶴	昭和17年5月30日	疾病兵免 公務死亡
野田 実	翔鶴	昭和17年5月7日	珊瑚海海戦
坂田清一	翔鶴	昭和20年7月26日	沖縄方面偵察

上記の10名は待機要員。島田清守さんについてはNHKが令和3年12月8日に放送した歴史探偵「写真で迫る真珠湾攻撃のリアル 若者達は何を感じたのか？」でその日記と共に特集が組まれた。佐々木隆寿さんは真珠湾攻撃参加者のうち最後の戦死者となった。終戦の一日前である。

【空母「瑞鶴」へ配属】

伯父は約十カ月に亘る教員配置を解かれ、空母「瑞鶴」への転勤を命ぜられる。教員配置の間、第一線で活躍する同期生や先輩の消息を聞き、内心忸怩たる思いを抱いていたのではなからうか。

「瑞鶴」は真珠湾攻撃に参加後、セイロン島コロンボ攻撃、ツリンコマリ攻撃、珊瑚海海戦、第二次ソロモン海戦、南太平洋海戦と激戦を重ね、多くの航空機と搭乗員を失った。攻撃隊再編のため伯父に転勤命令が出たものと思われる。

余談であるが、珊瑚海海戦では瑞鶴艦爆隊の一機が対空砲火による飛弾後、給油艦ネオシヨーに体当たりを敢行している。体当たりを行った搭乗員は石塚重男二飛曹(操縦)川添正義三飛曹(偵察)である。石塚二飛曹は旧制新発田中学出身で甲飛三期生である。真珠湾攻撃には空母「加賀」

の急降下爆撃隊の一員として参加している。石塚二飛曹には故郷に交際していた女性があり、戦死を知らされた女性も、戦日も泣き明かしたという。尚、ネオシヨーは漂流後、乗員を退去させ味方の駆逐艦により処分された。石塚二飛曹(新潟県北蒲原郡出身二十歳)と川添三飛曹(鹿児島県出身十九歳)の壮烈な最期は何人もの搭乗員が目撃しており、皆一様に度肝を抜かれたと証言している。

(注) コロンボ攻撃は昭和十七年四月五日に艦爆十九機、零戦九機が参加し艦爆九機が自爆した。四月九日にはツリンコマリを攻撃し、艦攻十八機、零戦六機が参加し零戦二機が自爆した。英空母ハームス攻撃に艦爆十四機が参加し、爆弾十三発を命中させ、艦爆隊の被害は無し。

(注) 史上初めての珊瑚海海戦は昭和十七年五月七日から八日にかけて行われ、瑞鶴攻撃隊は米空母「ヨークタウン」を中破させ

たが、飛行機隊は多数が未帰還になった。「瑞鶴」も被弾し、「瑞鶴」のミッドウェー海戦に「参加することは出来なかった。

(注) 第二次ソロモン海戦は昭和十七年八月二十四日に行われ、艦爆九機、零戦六機が出撃した艦爆隊は全滅した。

(注) 南太平洋海戦は昭和十七年十月二十六日に行われ、第一次攻撃隊に艦爆二十一機、零戦八機が参加し他隊攻撃隊と協力し、米空母「ホーネット」を撃沈したが艦爆十二機が自爆した。第二次攻撃隊に艦攻十六機、零戦四機が参加し、「エンタープライズ」を中破させたが、艦攻九機、零戦二機が自爆した。

【「ケ号作戦」に参加】

ケ号作戦は昭和十八年二月一日から七日にかけて実施された日本軍のガダルカナル撤退作戦。

作戦名の由来は「捲土重来」による。三回の撤収作戦によ

り約一万三千名の兵員の収容に成功し、沈没艦は一隻のみで奇跡的な成功を収めた。

瑞鶴飛行隊はケ号作戦の支援を行った。伯父は二月四日と七日に出撃している。瑞鶴の飛行機隊戦闘行動調書によれば、二月四日の攻撃は戦闘機隊十五機と協力し味方駆逐艦の直衛と敵艦船攻撃のためラバウル基地に派遣された。

戦闘機隊は味方駆逐艦を攻撃する敵機五十四機と交戦し二十五機を撃墜し、艦爆隊も敵機六機を撃墜したとされている。戦闘機隊に一機未帰還あり。艦爆隊の戦果については他に記載なし。

二月七日については敵を発見できなかったと記載してある。九九艦爆は空中戦を行う能力もあるが、六機も撃墜したとは俄かに信じがたいところもある。

行動調書によればこの日交戦した敵機はグラマンF4F十四機、P39エアコブラ十

一機、カーチス艦爆二十九機の合計五十四機とあるが、零戦との共同撃墜もカウントさ

れているのかも知れない。敵味方とも自軍の戦果は膨らみがちであったことは戦後立証

されている。

続く

(注)18年2月4日瑞鶴飛行機隊戦闘行動調書より

小隊	機番	操縦員	階級	偵察員	階級
	1	平原政雄	大尉	水越良一	上飛曹
	2	田中孫治	二飛曹	坂田清一	一飛曹
	3	田中康則	飛長	宮島二郎	飛長
	1	畠山 尚	上飛曹	米田信夫	中尉
	2	矢野正一	二飛曹	伊藤 壽	飛長
	3	橋本俊治	飛長	大深正幸	飛長
	1	田中吉治	飛曹長	倉島三郎	上飛曹
	2	櫛 栄市	二飛曹	本田富重	二飛曹
	3	山本 敏	飛長	萩尾 隆	飛長

小隊番号の記載なし

(注)18年2月7日瑞鶴飛行機隊戦闘行動調書より

小隊	機番	操縦員	階級	偵察員	階級
24	1	平原政雄	大尉	重近 勇	一飛曹
	2	田中孫治	二飛曹	坂田清一	一飛曹
	3	田中康則	飛長	宮島二郎	飛長
22	1	福井 斉	上飛曹	米田信夫	中尉
	2	伊藤兵一	二飛曹	北 則光	二飛曹
	3	下川部春夫	飛長	飯田良一	飛長
23	1	大石忠敏	上飛曹	武藤彌三	上飛曹
	2	佐々木正秋	上飛曹	田中清喜	一飛曹
	3	宮 耐吉	飛長	有本幸男	飛長

【お詫び】

前号四八一号において、終盤の記事の一部に掲載漏れがありました。そのため該当箇所より改めて掲載をしております。前半の記事が前号と重複しておりますが、何卒ご容赦ください。(編集人)

香月兵曹を偲んで②

中岫^{なかつき} 正彦 (乙飛五期)

「どうした、香月兵曹！」
やがて機銃の射程外に出た時、右前方に巨大な水柱が上がった。つづいて何本かの水柱が前面に立ち塞がった。私はとっさに左旋回しながら急上昇してこれを避けたが、これは明らかに主砲射撃によるものであった。

やれやれと胸をなで下ろしたのも束の間、左方から近づいてくる中翼機二機を見つけた。

「おい、左方の飛行機は何か」
「あつ、グラマンだ」

びっくりするような大声で叫び返してきた。

「よっしゃ、やるぞよいか」

敵は高度差を利用して突っ込んでくる。わたしは機首を左に振って正面から反航戦に入った。不意打ちさえ受けなければ、グラマンF4には負けない自信はあったが、敵は十三ミリ機銃八門、こちらは七・七ミリ固定銃二挺と旋回銃一挺しかないから、まともに戦っては不利なことは十分承知していた筈であるが、わたしは正面戦を挑んだ。こちらにも固定銃があることを示したかったのかも知れない。正面からこられて驚いたのか敵の一番機は遠距離から打ち出してきたが、わたしが固定銃の把柄を握ったとたんに引き上げて行った。二番機は勇敢に近づいてくる。

いよいよ接近して銃口を開いた。たがいに飛び交う曳痕

弾がもつれ合った。二番目が引き上げたので、これ等が切り返してくるまでに体勢を立て直して次の攻撃に備えようと右を見た瞬間、グラマンの編隊が見えた。

「右の編隊は何か」

「あつグラマンだ、畜生！」

「落ちついてしつかり頼むぞ」

「はい、やりましょう」

これが香月兵曹の最後の言葉であった。

敵編隊から分かれた四機が、右下方から撃ち上げてくる。下手に転舵して目標を大きくするよりはと、私は四機の間に入り飛込むとした時、後上方から突っ込んできた先ほどの二機が銃口を開いた。その射弾が四機の間を縫った。四機は右上方に退避した。

（しめたっ）と思った瞬間、カーン、と物凄い音をたてて左耳元に火花を感じ、破片が計器盤に飛び散った。「しまった！」と思わず身を縮めな

がら右にひねった。敵機が間近に引き上げていくのに、偵察員の旋回銃はそれを撃たない。不吉な感に打たれて後席を見たが、彼は後ろ向きのまゝ頭を下げていた。

「おい、香月兵曹、どうした香月兵曹！」

幾度呼んでも返事がない。グラマンF4Fは次々に後方から打ち込んでくる。わたしはそれをかわしながら前方の断雲に逃げこむことにした。やっと雲の中に入って声をかけたが返事がないばかりか身動き一つしてはくれなかった。ダダダダッと物凄く撃つてきた。雲が薄かったので間もなく飛び出してしまった。

待っていたのは三機で共同攻撃をかけてきた。また新しい六機編隊が反抗してきたが、これはそのまま通り過ぎて行った。ふたたび雲の中に入り、出来るだけ厚い雲を通りながら針路を北西に向け警戒しながら雲から出た。下方に三機

編隊がいたが、私を見なかったのかそのまま飛び去って行った。

私はまた香月兵曹を呼んで見たが、前と同じ姿勢で身動き一つしない。

地上砲火を受けた左フラップと方向舵の一部が飛んでいるほか後席に三発ほど撃ち込まれ、旋回銃の銃口は上を向き、装着された弾倉がうち破られている。香月兵曹は、射撃中に頭を撃たれたものと判断された。

わたしの左肩先の風防と右横に弾痕があり、動力計器の一部が壊れているが航空計器には異状なく、エンジンも快調に回転している。

これならば母艦に帰れると思ったが、香月兵曹を信頼しきっていたわたしは、不覚にも敵艦隊の位置を記入していなかった。正確な帰投針路を算定することができなかった。

そのうえ長時間の空戦で機

位の確認が困難であった。私は高度を上げ、まず敵艦隊の発見に努力したが、われわれの爆撃した敵は雲のため発見できなかった。

北西に向かつてしばらく飛んでから、立ちのぼる一条の煙を発見した。近づいて、それが空母である事を確認してから、帰投針路を算定し機首雄定針したのは九時四十五分であった。

次第に高度を上げ、三千メートルで飛びながら後席を調べてみた。香月兵曹は後ろ向きになって頭を垂れた姿勢のまま、わたしの呼びかけには何の反応も示してはくれない。

そばに行つて抱き起してやりたいが、操縦席と偵察席の間には、わずかに手が入る程度の穴があるだけで、無情にも隔壁によつて完全に遮断されているので、それは許されない。

あの時、私が右から来た四

機に気を奪われていなかったら、彼を戦死させなかったであらうと思うと口悔しかった。

「許してくれ香月兵曹、君一人は死なせやしない。必ず仇を討つてから私も後につづくから、それまで待つていてくれ。今日は母艦まで帰つて、軍医長に診て貰うからね」

と身動き一つしない香月兵曹を、風防越しに見ながらはなしかけていたが、私はこの言葉を何一つとして実現することができなかった。

空と海以外に何も見えない洋上を飛びつづけるただ一機の九九式艦上爆撃機の中で、私が話しかえることのできるのは彼以外にはなかった。

単調な下界を睨みながら、四十分、五十分と時間が経過するにつれて、私には不安感が芽生えてきた。もし母艦を発見できなかったらどうすべしか、不吉な予感が頭に浮かんだ。

私は、それから遁れるため

に、今までの出来事を追つて時間を費やすことにした。

一瞬の差が死を招いた

香月兵曹とペアになったのは、アリューシャン海域から帰つた隼鷹が鹿児島基地で始めた時からで、まだ四か月足らずであるが、彼の第一印象は、まじめな下士官であるがなんとなくゆとりがないような感じを受け、戦場の変化に即応できるか不安もあった。

それは当時善行章一線しかない若い下士官に対する偏見だったかもしれない。

しかし、それを打ち消して信頼できると思ったのは、佐伯湾を出撃して連合艦隊の根拠地トラック諸島に向かつていた十月八日であった。

その日早朝、スコールで濡れた飛行甲板を蹴つて艦爆二機が前路哨戒に飛び立った。

これは航法訓練を兼ねるもので、航空戦隊の予定進路に対して十度ずつひねつて発進

し、百五十海里出てから外側に変針して、三十海里の側程を飛んで帰投するものであった。

わたしと香月兵曹は、日ダル側のコースを飛んだ。艦爆偵察員には、無線の送受信や暗号の取扱い等いろいろな仕事がつて、航法だけに専念できないが、彼はその性格通り、キチンと偏流を測定して飛行針路を計算した。

前方にスコールをともなつた積乱雲があり、その付近は風が強く風向も定まらないが、彼は一生懸命航法をつづけた。わたしは洋上の白波の変化や雲の影にまで気を配りながら、予定コースを飛び、二時間半後に着艦した。哨戒中敵を見なかったが、彼の航法は正確であった。

その後、ガ島北方海域に進撃して、敵飛行場砲撃部隊の対戦警戒や上空直衛機の誘導等に飛んでいたが、十月十五日には、エスペランス岬東方

に上陸する陸軍部隊援護の第二次制空隊零戦十二機を誘導して、母艦から二百五十海里以上離れたガ島に急行した。

この時彼は、近くに敵飛行場があるという緊張感があつてか、一抹の不安をかくすことができなかったようで、何回も身を乗り出して、双眼鏡を見ていたが、

「もうそろそろ見えるころですが、まだ船団は見えませんか」

「島が見え出したから心配するな」

「前方に煙が見えますが何でしょうか」

はじめて見る戦場の光景に、そこが目的地であることを疑っていたようであつた。

近づいてみるとそれは確かに味方であつたが、船団という言葉とは大きくかけ離れていた。碇泊して陸揚げ作業を急いでいる三隻の中、一隻は傾いて前部から煙が立ち上がっており、少しはなれて陸岸

乗り上げた形で物資を陸揚げしている一隻は炎上しつづつあつた。

「ひどい状態ですね。一体何隻位やられたのでしょうか」

彼は深く心を打たれたようであつた。

わたしたちが上空に行った時、陸軍部隊は喜んで作業に励んでいるように見えた。少しでも長く上空にいてやりたいが、母艦からの距離が遠いためそれが許されないのです、

任務時間を十五分延長してから、陸軍部隊の健闘を祈って帰途についた。母艦への帰投は計画通りで彼は完全に自信がついたようであつた。

十月十七日、伊藤大尉指揮の艦攻九機が、ガ島飛行機爆撃に向かったが、しばらくして同期生大多和達也飛曹長操縦の爆撃誘導機が油だらけになつて緊急着艦した外は、一機も帰還しなかった。

この日からわたしたちが艦攻隊に代わつて飛んだが、こ

の索敵で二百海里進出コースを立派に飛んだ後は、もう何の不安もなかった。

その完成された偵察員が機上戦死を遂げた。しかも、わたしが前方の四機の行動に気を取られて回避動作が一瞬遅れたばかりに、彼を不帰の客としたのが本当に口惜しかった。

孤独な飛行が続いて、長い長い時間が経過しているような気がした。その間、わたしは幾度も香月兵曹に話しかけながら後席を見た。

「香月兵曹許してくれ」

一〇五〇、幾条かの白波を発見したが、それは前衛部隊であつた。

更に二十分過ぎて、南東に向かって高速で進撃してくる前進部隊の上空に達した。

しかし、付近に隼鷹の姿がなかった。

わたしは、その後方から必ず隼鷹が南下してくるものと

判断して、そのままの針路で飛んだ。十一時半三つの白波を発見した。

これこそ母艦であると思つて、高度を下げ味方識別をしながら近づいたが、それは傷ついて戦場を離脱する重巡筑摩と、護衛する駆逐艦二隻であつた。

わたしは、母艦を発見できない場合は、香月兵曹には申し訳ないが、ここに不時着する決意をして、燃料の残量を調べてから、筑摩を基点とする一時間の搜索を開始した。

白い艦尾波だと思つて近くとそれは白い雲であり、黒い艦影に見えたのは黒雲か雲の影でしかなかった。

「香月兵曹許してくれ、俺は遂に母艦に連れ帰れることができなかつた」

戦友のいる母艦に帰つてみんなに会わせることができないのが残念でならなかつた。

一時間余り過ぎてふたたび筑摩に近づいた時、上空にB

17爆撃機一機が飛来し、四弾を投下したが被害はなかった、敵機が遠ざかり筑摩と二隻の駆逐艦が、元の針路と速力になるのを待つて、後続している浦風の前方に不時着した。少しでも長く浮かせて置いたため、わたしは着水と同時に浮沈装置のハンドルを引いたが、それは無駄だった。脚の引き込まない九九艦爆は転覆し、私の脱出後まもなく沈んでしまった。香月兵曹を機外に出す暇がなかった。

浮き上がってくるのではないかと思つて、一周して見たが何一つ浮き上がってはこなかった。停止してくれた浦風に向かつて泳ぎながら、何回も後ろを見たがわずかに泡立っている以外、何の変化も見られなかった。

私は救助されたが、香月兵曹は傷ついた愛機に乗ったまま、東経百六十二度二十分、南緯六度五十一分の南太平洋に沈んで祖国の神となった。

浦風艦上に上がったわたしは、濡れた飛行服のまま舷側に立つて、香月兵曹と愛機の沈んでいった海面を見つめていた。

浦風で貸してくれた被服を持って、救助指揮官に促された艦内に入った。

そこには、石丸豊大尉の遺体があった。ライフジャケットに瑞鶴と書いてあった。

わたしは彼とは面識がなかったが、救助に当たった兵曹長の話によると、石丸大尉は艦爆を操縦して浦風上空に來た時、その偵察員は極めて元気で、浦風に大尉の負傷を知らせると共に、操縦席に向かつて話しかけて励ましていたが、操縦員が遂に力つきたのか、十メートル位の高度から海面に激突し、大尉だけが投げ出されて収容されたが、すでに手遅れであつたと聞かされた。そして、あれほど元気だつた偵察員は飛行機と共に沈んでしまったとのことであ

つた。

わたしは、石丸大尉の遺体に合掌してから衣服を着替え、艦橋に上がつて救助されたお札を述べると共に、わたしの見た敵情と戦況を報告してから、士官室兼食堂に入り昼食をとつた。疲れが急に出了たような気がして、目を閉じたまま今日の出来事を顧みていた。

十六〇〇、館長伝令の後に続いて浦風艦橋に駆け上がった。上空には零戦五機が飛んでいたが、浦風は母艦の位置を確認できなかったので、わたしは不時着させて救助するよう依頼した。間もなく、渡辺西雄中尉以下三名が救助されたが、他の二機は夕暮れせまる北東の空に向かつて飛び去つた。当時の艦爆は、通信装置はすべて偵察席にあつて操縦員は使用できなかったが、零戦は通信装置があるので、母艦の通信を受けたものと考えられたが、この二機は遂に帰つてこなかった。

渡辺中尉らは、隼鷹から発進した入来院大尉指揮の艦攻七機の支援に飛んだが、雷撃隊が敵艦隊に突入後これを見失つたものであつた。

翌朝八時、浦風の後甲板で石丸大尉の水葬の儀が行われた。軍艦旗をかけられた石丸大尉の柩に合掌しながら、その中に香月兵曹も一緒に入っているんだなと思えてきた。艦尾右舷に作られた水葬台を滑り落ち、静かに海中に沈んで行く柩の中に、香月兵曹の顔が見えたような気がして冥福を祈つていた。

トラク島に入港した浦風と谷風に、対潜水艦相当の命令が出されたので、わたしたちは、機関故障のため二十三日に隊列を離れて帰港していた飛鷹に移乗することとなった。

浦風乗組員は極めて親切で、何の不便も感じなかったが、あれから三十八年過ぎた現在、わたしはこの人たちの名簿を

紛失し、お礼を申し上げることができないのが残念でならない。

飛鷹には中沢岩夫飛曹長や、同期の中川静夫飛曹長等の戦友がいて暖かく迎えてくれた。わたしは本当に助かったことを痛感した。それは任務を終了して母艦に着艦した時の安心感と共通のものであった。だが、ここで意外なことを知らされた。それは隼鷹の艦爆隊長以下多数の戦友たちの未帰還であった。しかしわたしは、その人たちを戦死に結び付けることができなかった。

なぜならば、とうぜんのことながら、渡辺中尉とわたしの名もその名簿に入っておりわたしは自爆機を目撃しなかった上に、味方の艦隊が近くまで進撃していたので、この人たちもわたしたちのように味方艦隊に救助されていると信じたかった。

十月三十日この作戦に参加した全艦隊が入港し、私たち

が隼鷹に帰った時、飛行甲板では南太平洋海戦に賜った勅語奉読式が行われていた。

私は艦長に帰還報告と香月兵曹の戦死を報告した後、飛行長から、山口大尉、三浦尚彦大尉以下十九名と艦攻の入院大尉以下六名の戦死を知らされた。四期の木村昌富飛曹長と、同期の大多和達也、田島一男両飛曹長等が健在であったことが、せめてもの慰めであった。

終わり

多田野語録

一心万変に応ず

特別会員

多田野 弘

表題は、安岡正篤がその著「経世の書『呂氏春秋』を読む」の中に記されている言葉で、自分の心さえ養い定めていれ

ば、人生のどのような変化にも処していけるという。言いかえれば、自分の在り方如何を問うている。だが、私たちの心は、身体と同じく生来備っているものと考えており、心の指示に従って動いている。このことに奇異を感じる人はいない。心がどうしてつくられたかを知れば、いかに不確実、不安定なものが分かるだろう。

下西風澄は「生成と消滅の精神史」に、「心という、よく分らないものがある、手に取ることもできないし、見ることもかなわない。あるのかないのかも、実は分らない。だから多くの人が、色々な角度から議論してきた。中世を経てカントにいたって、心という捉えどころのないものが、しっかりと対象化できたかのように思われた。心の問題が、解決されたかに見えたのだ。しかし、心は、そんなにやわな相手ではない。」と記して

いる。

また、芳村思風氏はその著に、「心というものは、生まれた時にはなかった。2・3歳頃から言葉を覚え、その言葉と言葉を組み合わせるようになる。その積み重ねによって理性がつけられた。私たちの心には、その理性が大部分を占めている。つまり、心は自分が作り出したものである。理性がでてくるためには言葉を覚えなければならぬ。その言葉も人間が作ったもので、合理的にしか適用しない。したがって理性は、言葉の持つ不完全性を免れない。故に、心を金貨玉条と考えてはならない。」と述べている。諺に「心を主とする勿れ、心の主となれ」ともある。人間にとって大事なことは理性でつくるのではなく、すべて感じることである。たとえば、幸福・愛と信頼・生き甲斐・勇気・責任など、合理的ではなく、感じることによ

ってしか知ることができない。卑近な例を言えば、豪邸に住み、主人は大会社の社長、息子は東大在学中、何不自由ない暮らしなのに、妻が「私は何て不幸せなんだろう」と嘆じていれば幸福ではありえない。それに比し、六畳一間に親子三人つましく暮らしていても、「私は何て幸せなんだろう」と、歎じるならば幸福である。

である。

私が、今の自分をどう感じているかを述べたい。はかばりながら、現在、私の人生で一番、生きていることに幸せを感じている。それ以外何もいらぬという、心の豊かさや平穏である。なぜなら、青年期に、3年間南方の4つの島で、毎日死を前にして戦った逆境が私をつくってくれたが故である。その逆境から多くを学び歩んできた。共に戦った中で、現在達者で生きているのは私一人である。今生かされ生きているだけを幸せに

感じる。逆境が人間をつくるの一心は、万変に応ずといえ

るだろう。

続く

雄翔館見学者所感

ひこうきにのってくれた人、日本をまもってくれた人。

感謝をこめて、ありがとうございます。

令和五年八月

住所不詳 山内様

本日は、妻と参りました。

以前は、若い姪っ子と来ましたが、姪はともすると不良と呼ばれる日々を送るような娘でした。しかし、ここへ連れて来た時、神妙な顔をして展示を見て「マジメになる。」とだけ、ポツリといったことを今のよう思い出します。今日は妻と来ましたが、妻もあまり普段は戦争のことなどには興味を持ちませんが、今日、ここの展示を見て「ここへ来たら、戦争はしてはいけ

ないとわかるね。」と言い、「ウクライナやロシアの人達に見せてあげたいね。」と申しました。私も同感です。

どうかいつまでも、ここの雄翔館を残してくださいますようお願い申し上げます。

令和五年八月

埼玉県草加市 高葉様

四年ぶりの訪問となりました。その間、教育現場は、コロナ対応、働き方改革と一昔前とは別物になろうと大きく動きました。昭和生まれの私が古いのかもしれませんが、不易であるものが改革の名の下にどんどん変わり、消えています。「そんな事でも人のため」、「嫌な事でもやって、そこに価値を見つける」、「成

果を誇らず、恩は周りに……」

これらは、戦前・戦中を生きてこられた方々、また生き抜くことが叶わなかった方々が残して下さった日本人の美德でした。効率や成果、数値は確かに大切でしょう。生活が豊かで快適になっていくことも重要です。しかし、それらが自分だけのものになってはいけません。日本と世界の幸福・発展を果たすべく、文字通り身を捧げた先人に恥じない教育を届けることが私共の責務だと改めて思った次第です。本日は、背筋を伸ばして帰宅できます。感謝を申し上げます。いですね。

令和五年八月

茨城県石岡市 草野様

私は、ここに来て、国のために戦った若者達がいっぱい涙が出そうになりました。国のために学校で勉強し、厳しい訓練を受けて、ついには戦争に行つて死んでしまうと

いう悲しい人生をむかえ、行く時には、お父さん、お母さん、兄弟に手紙を送る。そういう人々によって今、私達は平和に楽しんで暮らしてるんだなあ、と思いました。これからは戦争のない平和な世界になってほしいと願います。

令和五年八月

茨城県常総市 三瓶様

今の私達の生活、引いては今の日本が存続しているのは、言うまでもなく護国英霊であるあなた方のお陰であります。自らの命を賭して祖国を守って下さったからこそ、平和に生活を送る事が出来ております。ただ、先輩方が今の日本を見たらどう感じるのでしょうか。

我々にできる事は、遺志を受け継ぎ、二度と戦争を起こさない事であり、この平和が当たり前ではない事に感謝して生き続ける所存で御座います。一人の退役軍人として、

日本人として、心より感謝申し上げます。

令和五年八月

東京都大田区 岡部様

戦争で亡くなられた方々の思いや気持ち伝わってきて胸が痛くなったけれど、当時の状況や暮らしが分かりました。自分と年の差も少ない方々が日本のために命をかけて戦ってくれたのに、自分は情けないなと思ったので、命をかけて亡くなってしまう人々の思いや、家族や仲間が亡くなってしまった人々の思いを受け継いで生活したいです。

戦場に行ってくれた人々に感謝しきれないです。今の日本を造り上げてくれて、どうもありがとうございます。

令和五年八月

埼玉県三郷市 中村様

(十三歳)

出撃前の写真の笑顔、どう

してあの様に美しく笑っているのか、心からの笑顔なのか？

本当に心を打つ写真だと思っています。家族の為に未来の日本の平和を願いながら散っていった沢山の若者達に敬意を感じました。彼らの尊い犠牲の上に今日の日本があるので、今の日本を思う時、大変申し訳ない思いになります。日本の社会に変化が起こり、正しい教育が子供達になされなければいけないと思います。今の教科書で伝えられないこと、タブーとされていることを明らかにしてこそ、再び日本人としての誇りが生まれ、予科練生もうかばれることだと思いました。

令和五年八月

神奈川県横浜市 南波様

自分が育った場所に雄翔館や予科練平和記念館があるのは、予科練や戦争、そこでどのように生きていたのかを知

る機会を与えてくれる大事な場所であると感じた。遺書や遺品を見ることで、彼らが日々どのような気持ちで各地に飛んでいったのかというところを感じられるし、今一度、考えないといけないなと思った。彼らが生きていたということを覚えていたいと思う。個人的に、「その日の朝まで話していた友達が……」のエピソードに心がえぐられるような気持ちになりました。また訪れると思います。

令和五年八月

住所・氏名記載なし

核抑止論は破綻した。

日本政府、何故に核廃絶に向かわないのか。これも、太平洋戦争の傷あとである。

令和五年八月

栃木県栃木市 阿部様

男子二人を連れてきました。今年、八月六日に広島に行つて平和について考える日々で

す。平和の尊さを日本に知らしめたことが予科練生の功績という言葉がとても重く感じます。親自身が学ぶことが大切と思いました。

令和五年八月

つくば市 今泉様

本日は、姉と参りました。先日は妻と来て、何度来ても私は「予科練の人達のおかげで今の日本がある。」それを感じ起こされます。感謝してやみません。どうかいつまでも、この記念館を続けてください。また参ります。

令和五年八月

埼玉県草加市 高葉様

わたしは、この雄翔館をみて、日本を守るために命をなぐしてまで戦ったことにびっくりしました。戦争とは何もかもを無くしてしまう悲しいものだと思います。これからは、戦争のない平和な世界にしてほしいです。

令和五年八月

住所不詳 田部田様

国のために訓練をして、日常をすごすたびに仲間をつくり、その仲間と話したり、時には真剣になったり、そして、最期は戦死する悲しい運命を背負って生きていく、雄翔館の展示物を見て思いました。もう二度とこんな残酷な戦争はおきてほしくないです。

令和五年八月

埼玉県三郷市 山内様

私は、中二になった学生です。自分は、小学校で教師を殴ったり、教室から出て遊んでいたりと親にも迷惑をかけて教師の方々にも凄く失礼なことをしました。そのせいで、ろくに漢字は書けず、字もきたないです。

中学に上がり、戦争などの歴史に興味をもちここに来ました。そして、当時の学生の生活を知り、とても虚しくな

りました。お国のために命まで捧げた彼らに土下座したいです。

とても勉強になりました。

令和五年八月

東京都葛飾区 高橋様

入代武茂氏のパネルに、自身の後に一億人が続くことを信じていると書かれていました。現実には、終戦とともに、みんな心変わりしてしまい、申し訳なく思います。亡くなられた若い方に今のきれいに造成された街並みを見せてあげたいと強く思います。次の戦争が近いような気がします

が、若い人の犠牲に頼ることがないようにしたいと願っています。東日本大震災のとき、ある政治家が原発の消火活動に六十歳以上のみんなで行くと東京電力に働きかけていました。戦争においても人生を樂しみ終えた私たちこそ、まず前線に立ちたいものです。

令和五年九月

住所不詳 飯田様

戦争に行かれた人たちの手紙を読んで、「布団もせまくて、そして、それを一分間にたたまないといけません。」と、書いてありました。男性なのにすごいなあと思いました。パイロットはヒーロー、そういつている みなさんを想像すると、とても熱心があるなあと思いました。私も、パイロットはカッコいい！と思うようになりました。

今は、便利な物がたくさんあることを、空から見てるヒーロー達に教えてあげたいです。寝床もベッドというものができて、たくさんさんの飛行機操縦者がいます。この感想文だけでも届いてほしい！そう思っております。

ヒーロー達に感謝でいっぱいです。ありがとうございます。

令和五年九月

住所不詳 萩原様

戦争の悲惨さを知ることが
できました。今後は、戦前の
偉大な英雄たちの遺志を 受
け継ぎ、日本の空を守ってい
こうと決めた。

令和五年九月

熊谷基地 氏家様
(自衛官)

たいへんためになりました。
この何気ない日常を守るため
に日々仕事を頑張ります。

令和五年九月

住所不詳 田上様

今日、海自で護衛艦に乗っ
ている息子の二十歳の誕生日。
今日も何処かの海の上にい
るのでしょうか。息子の語る
海は平和で美しい海です。皆
様の御心にかなうように、
日々頑張ってくれていると思
います。御安心に空の上から
見守っていて下さい。

令和五年九月

栃木県日光市 無記名

本当に若い方達が生命を投
げ出して戦ったのですね。悲
しい事です。是非、生まれ変
わって、今度こそ、日本の国
民になって、幸せに生きてほ
しいと思いました。どうぞ、
成仏なさってくださいませ。
他国の方達も、皆、成仏なさ
って、生まれ変わって、幸せ
になる事をお祈りします。

令和五年九月

栃木県日光市 福田様

二十歳前後の若者達が国の
為に戦死した事を忘れずにい
きていかなければならないと
改めて思いました。今、日本
国及び日本人が平和に暮らし
ていけるのも、彼らの日本を
守るという強い意志の上に築
かれているのだなと実感しま
した。

平和な世の中であれば、き
っとやりたい事もたくさんあ
ったことだと思っています。彼ら
への感謝、リスペクトはもっ

と必要ですね。

初めて来館しましたが、来
て良かったです。
遺影の若人達に安らかに！
と伝えたいですね。

令和五年九月

東京都足立区 野口様

(公財)海原会寄付者芳名簿 (敬称略)

(単位千円)

五〇万	多田野 弘 (一般)	香川
二	加賀谷有里 (一般)	茨城
一	上田佳江子 (一般)	北海道
五	為平 浩一 (一般)	兵庫
五	豊岡 昭 (甲16)	東京
三〇	佐怒賀正美 (非会員)	茨木
五	松本嘉一郎 (一般)	栃木
一〇	明石 英次 (甲9遺)	東京
五	磯部 恭子 (一般)	静岡
五	清水香代子 (一般)	愛知
五	仲居 昭栄 (乙20)	千葉
五	後藤田哲郎 (甲11)	神奈川
五	岩橋千代子 (乙1遺)	北海道
五	須原 可愛 (一般)	福岡
一〇	金塚 雅恵 (一般)	東京
一〇	蛭田 章 (乙24)	茨城

海原会へのご芳志誠に有難うございました。



事務局日誌

一月

十二日

#1慰霊祭実行委員会

於 海原会事務局

参加者 星指副理事長、

篠田理事、行方参与、平

野事務局長

十二日

阿見町賀詞交歓会

於 阿見ゴルフ倶楽部

星指副理事長が出席

十二日

編集会議

機関誌(三〇四月号)の

編集会議を、ZOOM

会議で実施した。

参加者 塚理事、平野理

事、工藤会員、原会員

十三日

会員等事務局訪問

於 海原会事務局

山内泉様、洪澤啓次様来

局

十五日

小さな展示室模様替

於 雄翔館

平野事務局長、行方参与

十六日

六車顧問来局

於 事務局

六車顧問が来局し、事務

局長と意見交換

十二日

武器学校訪問

於 武器学校(広報班)

平野事務局長が、慰霊祭

の協力要請のために広報

班長を訪問

二十四日

三者会同

於 事務局

予科練平和記念館長、豊

崎氏、阿見町観光ガイド

会長、寛田氏、平野事務

局長で意見交換を行った。

三十一日

原監事来局

於 事務局

監事の原雅英氏が、事務

局長との意見交換のため

に来局

二月

十四日

ご遺族来局

於 事務局

丙飛十期生西村誠様の御

遺族が来局

十七日

二月定例理事会

於 事務局

出席者 星指副理事長、

篠田理事、平野理事、原

監事、行方参与、池顧問、

宮本顧問

二十一日

三者会同

於 事務局

予科練平和記念館長、豊

崎氏、阿見町観光ガイド

会長、寛田氏、平野事務

局長で意見交換を行った。

二十二日

武器学校OB幹事会

於 武器学校

平野理事、篠田理事が出

席

二十八・二十九日

公益法人会計セミナー

参加

於 埼玉会館

公益法人協会主催のセミ

ナーに平野理事が参加し

た。

【お知らせ】

海原会機関誌「予科練」では会員の皆様からの投稿記事を募集しております。

・同窓の方の思い出

・予科練・海軍に関わる事

・慰霊・顕彰への思い

・海原会へのご意見

・「予科練」へのご意見 等

お気軽にお寄せください。

【原稿のお送り先】

〒300-0301

茨城県稲敷郡阿見町

青宿489-1 慎輝ビル 3階

公益財団法人 海原会 事務局

電話：029-886-5400

[E-Mail]

y-hirano@yokaren.jp

海原会会員の皆様へ

小さくてもあたたかい

一日葬 家族葬

お葬式のご依頼や
「もしものとき」に
備えた事前のご相談
年中無休で承ります

相談
見積 **無料**

お客様満足度
99%

※
自宅葬、一日葬、お別れ会のほか、
ご希望に合わせた
お葬式プランがご用意です。

※当社施行客アンケート調べ

新型コロナウイルス感染拡大防止に万全を期しています。

お墓

お墓のことなら何でもご相談ください。墓石工事は信頼の10年間の保証書付きです。

墓所工事
標準価格
(10万円以上)の
10%割引

サービス提供エリア:
関東・関西・東海

「お墓のお引越しガイド
& 事例集」

無料で資料を差し上げます。



お葬式

葬儀一式をセット化した「葬儀式セットプラン」を各種ご用意。最適なプランをお選びいただけます。

葬儀
祭壇標準価格の
20%割引

※一部会場、一部商品は除く。
新花で送る家族葬は
優待料金
サービス提供エリア: 関東

「お葬式の流れが
わかる100項目」

無料で資料を差し上げます。



お仏壇

仏壇店は首都圏に2店舗(国分寺・千葉)。伝統型仏壇や家具調仏壇、手元供養商品まで豊富な品揃えです。

仏壇
店頭価格の
25%割引

※ただし、催事特価品と
仏具小物、手元供養商品
は対象外
サービス提供エリア: 関東

「お仏壇カタログ」
「特選 お位牌」

無料で資料を差し上げます。



お問い合わせは
海原会事務局へ

029-886-5400

お問合せの際は、「予科練を見た」とお申し出ください。

MAO
MEMORIAL ART OHNOYA



メモリアルアートの大野屋

<http://www.ohnoya.co.jp>



「予科練」第482号 5・6月号

令和6年5月1日発行 発行人 安井 剛
(隔月奇数月1回1日発行) 編集人 塚 純一

発行所 〒300-0301

公益財団法人 海 原 会
茨城県稲敷郡阿見町青宿489番地1
(慎輝ビル3階)

郵便振替
00140154332
FAX 029-886-1644
029-886-1644

定価500円